上げます。

20. アメリカ歯科事情
ータフツ大学歯学部の教育研究に関する報告ー

白井　伸一，坂口　邦彦
（歯科補綴２）

昭和45年（1970年）に，当時タフツ大学歯学部長のジョージ・マンフォード教授に招かれ，ティーチングフェローとして坂口がボストンに滞在した。それ以来，昭和60年には伊藤　仁元講師が，また今回は白井が本年４月より９月までアメリカ，マサチューセッツ州，ボストンのタフツ大学を主としてハーバード大学，ボストン大学の各歯学部で研修する機会を得た。そして，現在のアメリカにおける歯科大学の教育状況，歯科事情等について知見を得ることができた。

アメリカの歯科大学は1984年には60校あったものが1992年現在では55校に減少している。新入学性も6000人台から4000人を切るまでに削減している。今後更に廃校となる歯学部が増加すると予想される。また，各校とも学生教育用患者の減少に悩まされている。そこで，特色ある臨床実習を行っている。タフツ大学ではExtern-shipと称して６週間，外部の提携している診療機関において，インストラクター格の歯科医師の指導を受け，その間の内容がケースとして認められると言うものである。ボストン大学ではAPEX（Applied Proffesional Experinece）といい，１年から３年までの間に延べ10ヵ月間，同様に外部の提携機関に出向する。当然ケース数は莫大である。

さて，感染予防についてであるが，HIV，HBV等の感染に対しては過剰なほど神経を使っている。周辺器材はほとんどディスポーザブルであり，それ以外の物も患者毎にオートクレーブまたはEO滅菌を行い，マスク，グローブ等も患者毎またはユニットを離れるごとに廃棄する。チェアー，キャビネット等の術者が触れると思われるところすべてにラッピングする。したがって，これらにかなりの時間と経費を費やすことになる。日本の現状の保険制度の中で行うのは，大変難しいことであろう。

21. 歯内療法学の実習に関する研究
ーPCT-ENA模型を利用した電気的根管長（作業長）測定の実習結果についてー

木村庸一，高松隆常，加藤義弘
坂東省一，石井克枝，河合　治
文田博文，小鷲悠典
（歯科保存１）

研究目的

本講座では臨床実習期間，歯内療法のシミュレーションに抜去歯と電気的根管長（EMR）を利用して，歯内療法実習を行っている。本研究は，１）EMRを利用した根管治療の方法を学生に理解させる為，解剖学的根管長及び電気根管長の両者の関係を調査する。２）シミュレーション実習結果から理解・技量の異なる学生に対するEMR測定の有用性についての指導方法を検討する。を目的に行った。

材料および方法

ヒト抜去歯（588根管）を被検歯として使用し，Ｈ４年度，保存科臨床実習生が以下の手順で実習を行なった。

１）模型の調整と根管長測定：透明エポキシ樹脂性顎模型（PCT-ENA模型，ニッシン社製）に電気的根管長測定器が使用出来るように歯牙を植立し，通常の操作法で根管長を計測した。PCT-ENA模型はシミュレーション装置に取り付け，電気的根管長測定器（エンドドンティックメーターSII，小貫社製）のメーター値38のリーマー長を0.5mmの単位で計測，これをEMRとし，0.5mmの単位で計測した解剖学的根管長と比較・検討した。根管充塡後，歯根部を歯軸にそって切断，実体顕微鏡において根尖狭窄部の観察・記録した。